
鈴音は悲しく響く

帆立レノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴音は悲しく響く

【Nコード】

N7771P

【作者名】

帆立レノン

【あらすじ】

娘を病気で失った『俺』は、全てに絶望していた。

絶望を抱いたまま歩き続けていると見た事の無い田舎に着く。

そこで出会う『すずね』と名乗る女の子。自らを『終わった者』と言う不思議な女の子。『俺』と『すずね』はどんな物語を紡ぐのか。

貴方の大切なモノはどこにありますか？

前編「鈴音に誘われて」（前書き）

全3編の予定です。『貴方の青春を教えてください』と同じ舞台のお話です。最後まで読んでいただけたら嬉しいです。

前編「鈴音に誘われて」

「鈴音が悲しく響く」

前編「鈴の音色に誘われて」

雨が降っている。

土砂降りな雨は止む気配は無い。

俺は虚ろな眼差しで歩き続ける。

雨は止む気配は無い。

先日、俺の娘が死んだ。

妻を早くに亡くし、妻の分まで愛していた娘が死んだ。

何よりもかけがえの無い娘が死んだ。

病気で死んだ。

何を恨めば良いのか？

事故ならば相手を憎めば良い。

殺されたなら犯人に復讐すれば良い。

でも、病気は憎めないし、復讐も出来ない。

何も……出来ない。

……ただ歩く。無心に何も考えずに。

……そうすればきっと娘に逢えるから……

雨が、止んだ。

どれくらい歩いたのか、見た事も無い田舎に着いて居た。長閑な場所だ。

山が見える。美しい紅葉が目に入る。俺の足は自然にそちらに向かって歩き出した。

そして俺は山を登り始めた。

何を思ったのか分からない。けど俺の足は止まらなかった。

山は急勾配と言う訳ではなく、緩やかだ。

そんな事を思っている……

ちりん。

甲高い涼やかな音が俺の耳に響いた。

鈴の音？

ちりん。

音のする方向に俺は歩いた。何かに導かれるように……

ちりん。

一際大きくその音が鳴った。音の方向を見るとそこには、

ちりん。

「……………！」

女の子が居た。娘と同じぐらいの十にも満たないであろう女の子。

地面の方を見て俺には気付いていないようだ。何かを探している？

「む……………」

「……………っ!？」

女の子が俺の方を向いた。可愛いらしい、使い古された言い方をするとお人形さんのような顔立ちだ。和服を着ている為、更にその印象は深くなる。

髪飾りなのか彼女の頭には鈴がついていた。先程の鈴音はソレだったようだ。

「……………む。誰だお前は？ 人の顔をじろじろと見て」

鈴を思わす高い可愛いらしい声だった。

どうしてこんな山奥に女の子が？

「え？ いや俺は……………」

「ちょうど良い。手伝え」

そう言つと女の子は再び、地面に目を向け始めた。

「手伝えつて何を……………？」

「見て分からんか？ 栗拾いだ」

「栗拾い？」

「そうだ。栗、美味いだろう?」

よく周辺を見渡して見ると、確かに栗が点在していた。秋と言う実りの季節だけある。

そして、女の子が集めたであろう栗が沢山入った籠もあった。

「拾った栗はその籠に入れてくれ」

「……………」

言われた通り、俺はそこらにある栗を拾い始めた。

「何で栗を拾ってるんだ?」

俺は女の子に聞いてみた。

「栗は美味いだろ? 栗ご飯。栗きんとん。モンブラン。ああよだれが止まらない」

和洋折衷だった。

「いや…………そうだけど。だからって一人で山奥に居るのは危なく無いかい? その熊とかに会ったら」

「危険な動物はあまり居ない。それにわたしは一人では無い」

「? お父さんとお母さんと来ているのかい?」

そうでなければこんな山奥に女の子が一人で居る訳が……

「そんなモノは居ない」

あっけらかんと、さしてそれが当然、当たり前のようにそう言った。

「…………それって、どういう事……」

「? 何をそんなに驚いている?」

「それはっ。驚くだろ!」

思わず大きな声を上げる。俺の声がうるさかったのか、女の子は不快そうに眉をひそめる。

「急に大きな声を出すな」

「だ、だけどっ」

何故俺は、こんな奇妙な女の子にこんな事を言っているんだろう。娘とは似ても似つかないのに……

「居ないモノは居ない。知らないモノは知らない。元から居ないモノ

ノは知りようが無いだろう?」

元から……居ない?

「わたしは、『終わった者』だからな」

終わった……者……?

この女の子は、一体?

「……ちゃん」

遠くから女の声が響いた。

「む……この声は……」

「すずねちゃん? 何処ですかあー?」

遠くからやって来たのは16〜18歳くらいの和服を着た少女だった。

「あつ! ここに居たんですねっ。すずねちゃん」

「しぐれか……」

「全く……駄目じゃないですか! 勝手に旅館から出て、皆心配してましたよ! 大変だったんですよ!」

しぐれと呼ばれた少女は、女の子(すずねと言っらしい)にまくし立てる。

「すまん。しぐれ。栗を拾っていたら、思わぬモノを拾ってな」
そう言ってすずねは俺を指差す。

「あれ? 貴方は?」

不思議そうな顔をして首を傾げる少女。

「あ……俺は」

「あつ。お客さんですねっ! ですよね! ではご案内致します!」
違うと言う暇無く、腕を引っ張られる。

「え、ちよっと……」

「……」

すずねは、そんな俺をくすりと笑い、

「白雲旅館によっこそ」

そんな事を言った。

中編「夏色の幻想」

中編「夏色の幻想」

「蝉って夢いと思いませんか？」

「えっと……何を？」

娘のみすずは唐突にそんなコトを言った。俺は縁側で庭に佇むみすずを見る。病弱なみすずが外に出るのは珍しい事だった。みすずが唐突なのはいつもの事なので俺もいつも通りに返す。

「蝉の成体の命は二、三週間程度だそうです」

「まあ知ってるけど……」

幼虫や蛹の状態では数カ月以上地中に居るけど外に出たら数日の命なのだ。

「騒がしい癖に夢いんですよ。……数日の命と知っても彼らは鳴き続ける。彼らは何を思っているんでしょう」

「……………」

みすずが何を言っているか俺には分からない。

「きつと彼等は叫んでいるんだと思います。自分達は生きているんだと。ここに居るんだと。短い命と知りながら」

喧しく叫び続ける。

ここに居ると。

私はここで生きていると。

そして残すのだ。

生きていた証を。

「みすず……？」

「私も……ここに居ます。蝉みたいに叫ぶ事は出来ないけど私はここに生きているんです」

みすずの声が遠くなっていく。そしてその姿も。

「待ってくれみずず！ ドコに行くんだ！？」

「私は、ここに居ます」

そしてその姿は……掻き消えた。

目覚める。現実に取り戻された。

「みずず………？」

目の前に居たのは無表情な女の子……昨日の女の子だった。

「誰だ？ それは？」

「ッ！？」

慌てて起き上がろうとしたが、女の子は俺に乗っかっていたので身動きは出来なかった。

「おはよう」

「え……ああ、おはよう」

一体どうなってるんだ？

「ふむ……混乱しているようだ。落ち着いて深呼吸だ」

「……………」

俺は言われた通りに深呼吸をする。その間に頭も覚醒していく。

そうだ昨日……この女の子　　すずねちゃんに会ってそれから……

「ち、ちよつとー！？」

「？ 何ですかお客さん？」

「俺、金とか持ってないですよ？」

「それならお代は結構ですよ」

「……………」

「も、もしかして……泊まるの嫌ですか？（涙声）」

「おや……泣かせてしまったな」

「……………」

と言う強引な流れで俺はここ、白雲旅館に泊まる運びとなった。

疲れていた為昨日はすぐに寝てしまったのか……

「……落ち着いたか？」

「うん……とりあえずどいてくれないかな？」

「ふむ……重いかな？」

「いや……そう言うわけじゃ………」

「ふむ」

そう呟き俺から下りるすすねちゃん。一体何がしたかったんだ？

「モーニングコールだよ」

頼んで無い。

「美少女のモーニングコールだぞ？」

「………」

自分で言うか？

「もう少しこの矮躯が大人であればセクシなモーニングコール出来るのだが……残念ながら犯罪になつてしまふ。それでも良いと言うなら………」

「お願いだから止めて！」

着物を脱ごうとしたすすねちゃんを必死に止める。

「ふむ。冗談だ………」

なんかその言葉には残念そうな雰囲気があつたのが恐い。

「よつと」

身を起こす。服はこの旅館の浴衣だ。

「さて……起きたなら『李の間』に行くとするか。恐らく朝餉の用意は出来ているだろうからな」

「………」

昨日から思つてたけど古めかしい喋り方をする女の子だなあ………
キャラ作りなのかな。

「そんな訳なからう」

「………っ!？」

こゝ、心を読まれた!？

「軽い読心術だよ。頑張れば誰だつて出来る」

「……………」

本当……この女の子は何者なのだろうか？

李の間。畳張りの広間のようだ。紅葉の美しい中庭が見渡せるように窓が大きい。

目の前には旅館の割りには質素な朝食だった。まずは秋刀魚の塩焼きがあった。傍には大根おろしもあった。後はみそ汁にほうれん草の胡麻和え。後は漬物だった。

「お待たせしました」

良い匂いと共に茶碗とおひつを持ったしぐれさんがやって来た。この匂いは？

「もしかして栗ご飯ですか？

「はい。そうですよ。よく分かりましたね」

昨日すずねちゃんが拾っていたモノだろうか？

「それではどうぞお召し上がり下さい」

「それじゃあいただきます」

早速みそ汁を啜ってみる。

「！ 美味しい……………」

よく見ると様々な茸が入っていた。よくダシが効いていてとても美味しい。

そう言うとしぐれさんは顔を嬉しそうに微笑んだ。

「よかったです」

「栗ご飯も美味しいですね。しぐれさんが作ったんですか？」

「はい……粗末なモノですが……………」

「そんな事は無いですよ。とっても美味しいです。その……田舎を思い出します」

「しぐれの料理は古臭いと？」

「違うから！ 変な所で入って来ないでよ」

「……私の料理は、田舎臭いですか……………」

「違う！ 違いますから！ 涙目にならないで下さい！」

「必死のフォローだな」

「すずねちゃんもいい加減にして！」

「冗談だ。しぐれもいじけるな」

いいんです。いいんです。私なんて田舎に帰ればいいんです。とかぶつぶつ呟き始めたしぐれさん。

「ふむ……やり過ぎたか？」

「……………」

「アレは放って置いて食事を続けた方がいいのでは無いか？」

「……………いいのかな？」

「冷めてしまっただろ」

「……………」

仕方ないので再び食べ始める。

「なあ」

「ん。何？ すずねちゃん」

「その栗……旨いか？」

「？ 美味しいよ。凄く」

「そうか。よかった」

そう言っですずねちゃんはほんの少し嬉しそうな顔をした。そっか。この栗……

「やっぱりすずねちゃんが拾ったモノだったんだ」

「む……………」

「ありがとう。すずねちゃん」

「む……褒めても何も出んぞ？」

そう言っですずねちゃんは顔を赤らめて顔を逸らした。

それは表情はとても微笑ましかった。

「散歩にでも行かぬか？」

朝食後。部屋に居るとすずねちゃんが入って来てそんな事を言っ

た。

「俺と？」

「他に誰が居る？」

断る理由は特に無い。

「うん。いいけど……」

「なら行こう」

そう言ってすずねちゃんは俺の手を引いて歩き出した。

「なあ」

「ん？ 何？ すずねちゃん」

「貴方は今幸せか？」

「え……」

すずねちゃんはさらりとそんな事を聞いた。すずねちゃんの顔は見えない。

幸せ……俺は失ってしまったから……分からない。

「……私達は『終わってしまった者』だ。だが貴方違う」

「……何を、言って」

「行こう。貴方の幸せを見つけない」

後編「鈴音は悲しく響く」

後編「鈴音は悲しく響く」

みすずはもう居ない。何処にも居ない。

「だから何もかもがどうでも良かったのか？」

ああ。だから俺は死にたかった。死ねばみすずに逢える。そう思った。だから嬉しかった。

「死ねる事が？」

ああ。目の前にトラックが現れた時……死ねると思った。でも……成程……貴方が何故ここに来た理由が分かった」

いつの間にか田舎みたいな所に居て……そして君達に会った。

「……………」

ここは温かい。君達みたいな人が居て長閑で平和で何一つ不安を感じなかった。

「ここ……白雲旅館はある意味楽園だ。美しい自然に、美味しい食べ物。悩みを忘れ、やがて全てを忘れ消えていく……とても優しく悲しい場所だ」

……………俺は。

「私はしぐれのように死ぬなとか、ここから出ていけなどとは言わない。貴方が望むなら……………」

永遠にここに居ても良い。

「……………」

そう俺が言うはずねちゃんは頷いた。

ちりんと鈴音が悲しく響いた。

「……………だが、それは本当の幸せでは無い事を私は知っている。忘れる事は逃げる事……まやかしの夢に浸り消え行く事を貴方は望むのか？」

「…………俺は、どうでもいい。みすずを失った日から俺の時間は止まった。」

「そうか。なら私は止めない。だがその前にいくつか質問が有る」
質問…………？ 一体何を…………

「ここに来る者は迷いの有る者だ。死ぬ事に迷っている者だからだ」
俺が迷っている…………？ 何を…………

「貴方の娘は…………果たして不幸だったのか？」
当たり前だ…………短くして死んだんだ。

「貴方の娘は…………貴方が死ぬ事を望んでいるのか？」
…………それは…………

「貴方の娘は最期…………今際の言葉は何だった？」
その言葉に俺の記憶が蘇る。

病室のベットの。上。苦しくて痛くて仕方ない筈なのにみすずは笑っていた。

『お父さん…………皆は私を不幸だと言います』

『でも私は…………そう思いません』

『だって…………』

『頼りなくて、平凡で、さほど恰好も良くないけど…………』

『素敵なお父さんが居たのですから』

『私は…………死んでもお父さんの中に残ります』

『私はここに居ます』

『私は…………私は』

『幸せ…………でしたよ』

「少なくとも貴方の娘は笑っていたのではないか？」
そう…………か。忘れてたいた。みすずを失った事が悲し過ぎて…………

みすずの想いを。大切な事を忘れてたいた。本当に大切なモノ……
みすずは心に。

ずっと……居てくれたのか……みすず！

俺は白雲旅館のエントランスにいた。チェックアウトをする為だ。
「やっぱり俺……帰るよ。みすずが待ってる」

そう俺が言うとしぐれさんとすずねちゃんは微笑んだ。

「はい！」

「見つけられたようだな」

彼女達は一体何者なのだろうか？

「私達は只の旅館の女将ですよ」

「そして私はお手伝いさんだ」

「ははは。そうなんだ」

俺も笑った。久しぶりに笑った。そうか……こうやって笑うんだ
つけ。

「お客さん三つ……約束して下さい」

「ああ。分かった」

「一つ目は……私達の事を誰にも話さないで下さい」

「うん」

「二つ目は……絶対に振り向かないで下さい」

「うん」

「最後に……私達の事……忘れないで下さい。時々……時々でいい
です。私達の事を思い出して下さい」

「……」。ああ。絶対に忘れない」

そして。俺は歩き出した。振り向かない。もう二度逢えないと分
かっていても。

「さようなら。ありがとう……すずねちゃん」

ちりんと。鈴音が悲しく……嬉しそうに鳴り響いた。

大切なモノはきつと……案外近くにあるのかも知れない。

そんな簡単な事だった。

後編「鈴音は悲しく響く」(後書き)

全3部の予定でしたがエピソードを含めて4部に変更します。最後までお付き合いして貰えば恐縮です。 最後

エピソード「ここにある大切なモノ」

エピソード「ここにある大切なモノ」

「こら！ あんまり遠くに行かない！」

「それなら、追ってきなよ」

「せんせーのノロマ」

「な、なんだとお」

「わ」

我先にと逃げていく子供達。流石に子供は元気なモノで速い速い。

「はあ……」

「大変ですね」

同僚の先生が話しかけてくる。

「他人事だと思って……」

「ふふ……良かったです。元気そうで」

「そりゃ子供は元気だよ」

「違います。植村先生のコトです」

「俺の事？」

「その……色々大変だったじゃないですか……」

言い淀む先生。恐らく俺の娘が死んだ事、そして俺自身が交通事故に遭った事を言っているのだろう。

「娘さん……お亡くなりになられてから凄く憔悴されて……あのままこの幼稚園の先生辞めちゃうんじゃないかと思って……皆心配してたんですよ。そして事故に遭ったって聞いた時には……」

「……ごめんね。心配かけて」

あの日……白雲旅館から帰った時、気がつくと病院のベッドの上に居た。

一週間も意識不明だったらしい。

目を覚ました時近くにあったのは子供達の作ってくれた千羽鶴だった。

本当に俺は情けない。沢山大切な事があったのに……

「教えてくれた人が居るんだ」

「誰……ですか？」

「優しい人達。大切なモノは……近くにあるって……」

「素敵な方達なんですネ」

「ああ……」

本当に優しい人達だった。元気なしぐれさんに。素直じゃないけど優しいすずねちゃん

俺は絶対に忘れない。絶対に……

「せんせえ？」

子供達の一人が俺に近づいて来た。

「これ……あげる」

ちりん。

と鈴音が女の子の手の中で鳴った。

エピソード「ここにある大切なモノ」（後書き）

時間や大切なものはいつの間にか無くなり、いつの間にか手に入
つてゐる物だと思ひます。近くにゐるようで遠く。遠くに有るようで
近く。貴方の大切なモノはなんですか？

ここまでお付き合いいただきありがとうございます。
感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7771p/>

鈴音は悲しく響く

2011年3月1日14時56分発行